ナショナル・アイデンティティの概念図式
――「民族型ネーション」としての日本を事例とした実証的検討――

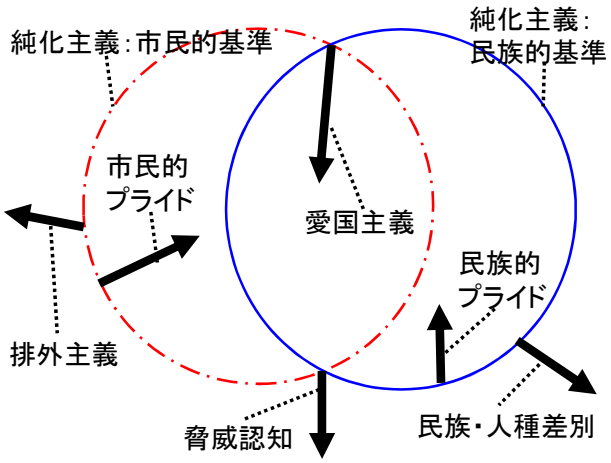
○早稲田大学　　田辺 俊介
東京女学館大学　濱田 国佑

1　目的

ナショナル・アイデンティティは、国際社会調査プログラム（ISSP）が 1995 年にトピックとして採り上げて以来、数多くの量的実証研究の対象となってきた。しかし、それら研究の多くは「ネーション」や「アイデンティティ」という基礎用語の定義すら一致していないため、概念的フレームワークがほとんど共有されておらず、結果的に得られた知見の比較可能性も低い状態が続いている。そのような状況の改善を目指して本報告では、先行研究の知見の整理を行うツールとなりうる、ナショナル・アイデンティティの概念図式を提示する。同時にその概念図式を元にデータ分析を行うことで、ナショナル・アイデンティティの下位概念間の関連を明確化することを試みる。

2　方法

方法としては、まず理論研究や実証的先行研究の精査によって、ナショナル・アイデンティティの概念図式を導出した。その上で、その概念図式に示した純化主義、愛国主義、排外主義、脅威認知という４つの下位概念について、民族型ネーションの典型例である日本のデータを用いて分析した。それによって右記の概念図式の妥当性を実証するとともに、その有用性を示す。具体的な方法としては、2009 年に日本全国を対象に行った量的社会調査で得られた上記４概念に関連する項目群を、構造方程式モデリングで分析し、概念図式から予想されるモデルとデータに基づく最適モデルの一致度を確認することで、概念図式の妥当性を検討する。



3　結果

構造方程式モデリングによる分析の結果、典型的な民族型ネーションである日本においては、純化主義の内の民族的基準と市民的基準が強く関連していた。しかしながら他の下位概念との関連には違いがあり、民族的基準が愛国主義と排外主義に影響するのに対し、市民的基準は愛国主義のみに影響を与えていた。またモデルの適合度の比較から、排外主義が（ネーションの外部の存在に対する）脅威認知を高めるというよりは、脅威認知が排外主義に強く影響していることが示された。

4　結論

まず民族型ネーションでは純化主義の２つの基準（市民的基準と民族的基準）の関連が強く、それらがあまり弁別されていないことが検証された。さらに外国人居住率が低いため現実的脅威となっているとは言い難い日本においても、脅威認知は排外主義に強く影響しており、想像上であっても脅威認知は排外主義の源泉となることが検証された。このように本概念図式をベースにした分析は、混乱気味のナショナル・アイデンティティの議論に関して、その知見の整理の一助となりうると考えている。